

## 第6回企画展「NOBORITO 1945 —登戸研究所 70年前の真実—」記録

### 企画展関連イベント「証言会」 元登戸研究所関係者が語る1945年の登戸研究所

---

#### 証言者（登壇順）

**栗山武雄氏**（元陸軍登戸研究所第四科第一班勤務員）

1941（昭和16）年から少年工員として登戸研究所第四科の機械工場に勤務。1945年の春ごろから兵庫県・小川村への疎開作業にも携わり、小川村にて終戦を迎えた。

**正地次男氏**（元陸軍登戸研究所第三科勤務員）

1939（昭和14）年から登戸研究所第三科にて偽札製造作業に従事。以来、敗戦後の偽札製造の証拠隠滅作業を含めた残務整理終了までの約7年の間勤務した。

**會津保進氏**<sup>やすのぶ</sup>（元陸軍登戸研究所第四科第二班勤務員）

1944（昭和19）年から少年工員として登戸研究所第四科に勤務。主に爆弾に火薬を詰める工程や敗戦後の登戸での証拠隠滅作業に携わる。火薬の材料などについては知らされていなかった。

**三上峰緒氏**（元陸軍兵器行政本部制式課タイピスト）

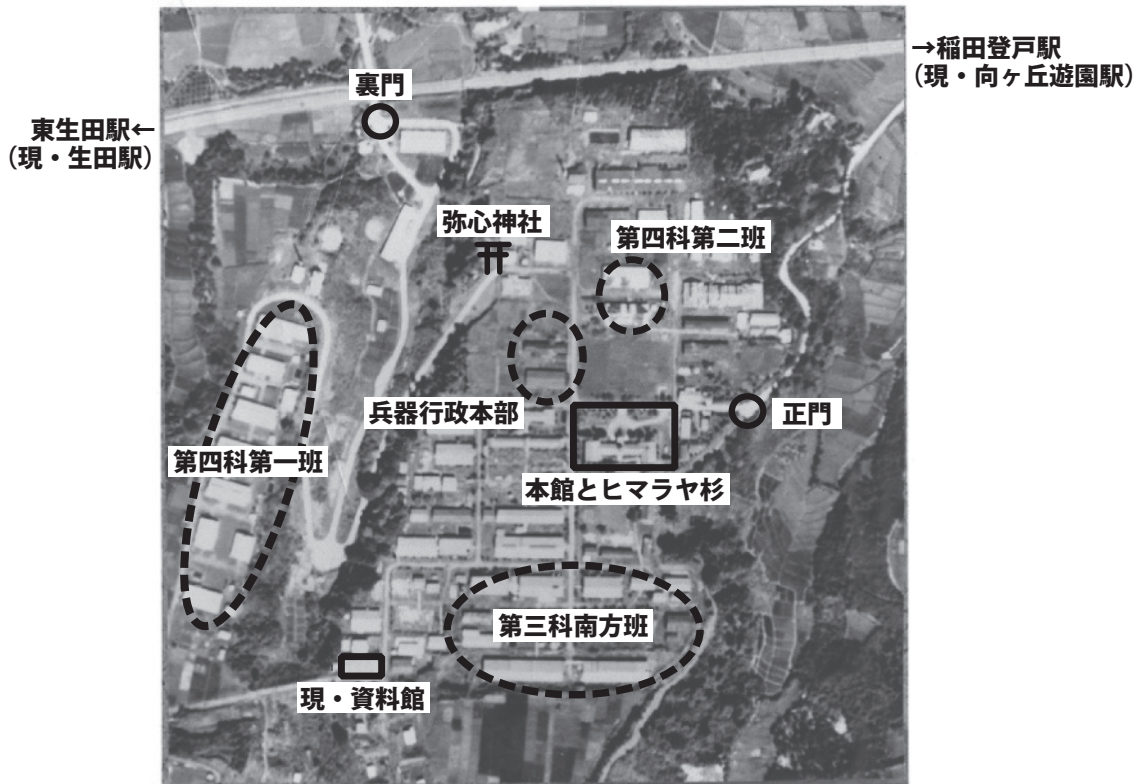
1942（昭和17）年よりタイピストとして元陸軍兵器行政本部制式課に勤務。1945年5月以降、空襲の被害を受けた兵器行政本部とともに登戸研究所の場所へ疎開をした。

#### インタビュアー

**渡辺賢二**（平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員）

**山田 朗**（文学部教授・平和教育登戸研究所資料館長）

参考資料

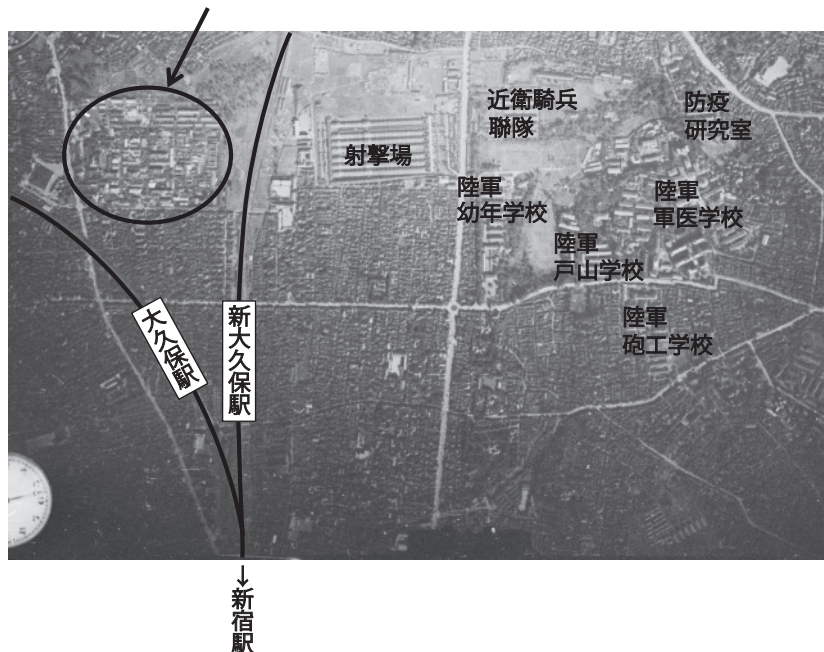


第1図

1945年6月以降の登戸研究所〔登戸分室〕

(国土地理院所蔵1947(昭和22)年米軍空撮写真をもとに資料館作成)

陸軍兵器行政本部 (現・新宿区百人町)



第2図

戸山ヶ原の陸軍兵器行政本部の位置

(国土地理院所蔵1944(昭和19)年陸軍空撮写真をもとに資料館作成)

〔山田〕 皆さまこんにちは。本日は登戸研究所資料館主催証言会にお越しいただきまして誠にありがとうございます。登戸研究所資料館長の山田です。よろしくお願いいたします。

登戸研究所資料館は、毎年このような証言会を行っております。それから、毎年11月から企画展をやっておりますが、今年は戦後70年という節目になるものですから、特別に8月から企画展をやっております。その企画展「NOBORITO 1945」は、1945（昭和20）年の登戸研究所はどうであったか、ということを表示しております。今日は、まさにその1945年の登戸研究所に関係した皆様にお越しいただき、登戸研究所でどういうことが行われてきたか、ということ伺ってまいりたいと思います。

まず簡単に登戸研究所の概要についてご説明します。この生田の地に登戸研究所ができたのが1937（昭和12）年です。これは元々、「陸軍科学研究所登戸実験場」という研究施設でした。それが2年後の1939（昭和14）年に「登戸出張所」という名前になり、組織が拡大します。この時点で、後に風船爆弾や電波兵器などを開発した第一科、毒物・薬物・生物兵器・スパイ用品を開発した第二科、そして偽札を行う第三科、というのができました。その後、太平洋戦争になり、登戸研究所の最盛期には1,000人くらいの方が働くようになりました。現在の西三田団地になっている辺りに、第四科という、第一科・第二科で開発した兵器の量産工場ができました。終戦近くになり、1945年に登戸研究所は分散疎開をします。これは空襲の危険ももちろんあったのですが、どちらかという本土決戦準備という考え方で、登戸研究所は長野県を中心とした地域に分散疎開をして、そこで兵器生産あるいは兵器開発を続けました。

本日は、4人の方に証言をしていただきます。會津保進さんと栗山武雄さんは第四科にお勤めでした。第四科というのは第一科、第二科で開発した兵器の量産を行っていたセクションです。もちろんこれも、移転をして、そこで生産を続けました。正地次男さんのお勤めは偽札製造の第三科です。基本的には印刷機を移設できないため偽札印刷はずっとこの生田の地で行われており、紙の生産などで一部福井県の武生の方に組織を移転して紙の確保などをやっていたようです。三上峰緒さんは、陸軍登戸研究所が属していた陸軍兵器行政本部にお勤めだった方です。兵器行政本部が空襲に遭い、その後登戸研究所のあったこちらに移ってこられました。

これから渡辺先生がインタビューをして、私もお手伝いをしながら、4人の皆さんに1945年の登戸、またその前後も含めたお話を伺います。よろしくお願いいたします。

〔渡辺〕 登戸研究所を調べ始めたのが30年前ですから、もう本当に長くとりかかってまいりました。そして登戸研究所に勤めた人たちが秘密にしていたものを次第に高校生なんかと一緒に話を聞く中でその苦しみや、あるいはやったことに対する慙愧<sup>ざんき</sup>の念やいろんなことを聞いて、やはりこれを伝えなければいけないということで資料館の建設など、市民

の方々と運動をしながら今日までやってまいりました。そんな関係で、1982年にできた「<sup>とけんかい</sup>登研会」という登戸研究所に勤めた方々の会に、1990年くらいから参加させていただきました。したがって、皆様方と共に、今日はその体験を聞きながら、登戸研究所とは何だったのか、特に70年前の登戸研究所の実態についてお話を聞きたいと思います。

今日は、各4人の方々に15分位ずつインタビューをさせていただき、横断的なものを深めながら、最後の10分くらいで皆様方からの質問にお答えするというやり方で進めたいと思います。

それでは最初は栗山武雄さんからお聞きします。最初に、登戸研究所に勤められたのはいつだったのか、何歳だったのか、ということをお願いします。

〔栗山〕 1941（昭和16）年の4月から15歳で入所いたしました。

〔渡辺〕 そのときはまだ登戸研究所とは言っていない時代ですね。

〔栗山〕 科学研究所ですね。

〔渡辺〕 そして1945年まではずっとお勤めだったということですか。

〔栗山〕 そうです。

〔渡辺〕 働くきっかけ、ここを選ばれたきっかけというのはどんなことだったのでしょうか。

〔栗山〕 それはもう、学校の先生から推薦されました。

〔渡辺〕 粕江のお住まいだったんですね。

〔栗山〕 はいそうです。

〔渡辺〕 粕江の方から結構大勢来られていたんですか。

〔栗山〕 はい、結構大勢来ておりました。

〔渡辺〕 それは小田急線で東生田〔現・生田駅〕まで来て上って来るわけですか。

〔栗山〕 当時は稲田登戸〔現・向ヶ丘遊園駅〕ですね。そこから歩いて坂を上って通いました。

〔渡辺〕 それでは相当かかりますね。それでお勤めの科は、どこだったのか。〔地図を指し〕ここがヒマラヤ杉、本館ですね。それから右側、〔現在の〕生田中学校の方ですか、四科というのは。

〔栗山〕 まだ拡張していませんで、どちらかと言うと本館に近かったですね。

〔渡辺〕 まだ弥心神社もないですね。動物慰霊碑もないですから。本館があってその近くですか。

〔栗山〕 そうですね。

〔渡辺〕 それでお仕事の内容はどういうことをやられたんですか。

〔栗山〕 各科・研究室で研究開発した兵器ですか。それを製造、というか試作ですね。試作することが仕事だったですね。

〔渡辺〕 機械工場？

〔栗山〕 機械工場です。

〔渡辺〕 どんな機械なんですかね。無線機とか、盗聴器とか。

〔栗山〕 旋盤とか、ボール盤ですか、あんな感じですね。要するに工作機械ですね。一通りやりました。

〔渡辺〕 ものがどのようなものになるかなんてことは、あまり知られてなかったですか。知ることができなかったですか。

〔栗山〕 ほとんどわからなかったですね。

〔渡辺〕 そういう旋盤とか部品を作るというのに専念されていた。それについて、例えば所内で大勢勤めておられる方がいると思いますが、会話とかほとんどしなかったですか。

〔栗山〕 そうですね。養成所といいますか、一年ぐらいは講義がありまして、それに出ることがまず仕事ですね。

〔渡辺〕 15歳で勤められるからここに慣れるまでの間は、後では青年学校と言うと思いますが、そこで勉強したり、基礎的なものをやるという段階を経るわけですね。それで配属が決まってくと。

〔栗山〕 いや、配属が先なんです。

〔渡辺〕 配属が先で。それでそこで訓練を受けるというか。15歳ですから、少しはちゃんと訓練しないと使い物にならないという判断だったかもしれないですね。

〔栗山〕 そうですよ。

〔渡辺〕 家に帰ったりしてもほとんどここで何をやっているのかなんてことは話すことはなかったですか。

〔栗山〕 職場にいても何をやっているのかさっぱりわからなかったですね。

〔渡辺〕 やっぱりやりがいみたいなのはありましたか。

〔栗山〕 当時は中国と戦っていましたから、当然お国のためという〔気持ち〕でした。

〔渡辺〕 一生懸命やったということですね。それで勤務する時間は9時くらいから始まるわけですか。

〔栗山〕 いや、もっと早くからです。

〔渡辺〕 もっと早くからですか。8時半くらいですか。

〔栗山〕 8時半かあるいは8時だったかもわからないですね。

〔渡辺〕 それで何時くらいまで？

〔栗山〕 定時は5時だったかと思うんですけども、はっきり覚えていません。

〔渡辺〕 15歳で勤められて最後までいられるわけですが、召集令状とかそういうのは来なかったですか。

〔栗山〕 それはありませんでした。ただし、当時は徴兵検査というのがありましたね。21歳で

行くって決まりだったんですけども、それがだんだん繰り上がりまして、19歳くらいまで繰り上がったんですね。一応それは受けました。

〔渡辺〕 その結果は合格でしたか。

〔栗山〕 非常にお粗末な検査でして、通常ですと裸になってやるんだそうですけれど、そういうこともありませんで、体格を見て「おまえは合格だ」と。甲種とか乙とか一応ランク付けされました。一応甲種になったんですけど、ここに勤めているということで免除されたんですね。

〔渡辺〕 ちょうど70年ぐらい前の話ですね、1945年。そのとき、4月29日に篠田所長がここを解散するという事になって疎開になりますよね。それでどこに疎開することになりましたか。

〔栗山〕 疎開ですか。疎開は兵庫県の小川分室ですね。

〔渡辺〕 登戸研究所は長野県を中心として、偽札の科は北陸、福井県武生・栗田部に行くんですが、西の方は兵庫県の小川分室というところに行くんですね。これについて山田館長がどういう意味があるのか話してください。

〔山田〕 本土決戦に際して日本軍は全国を二つに分けて、東日本は第一総軍、西日本は第二総軍という本土決戦を行う場所を2ヶ所に想定しました。西日本は、最初は九州の方から始まって、東日本は相模湾あるいは房総半島のあたりに米軍が上陸してくるということで、二つの場所に本土決戦場を想定しました。そのために、登戸研究所も全ての機能を1ヶ所に移すのではなく、西日本と東日本に拠点をそれぞれ作っていくんです。ですから小川分室も西の方に置く拠点という意味合いがあったかと思います。本当は九州で決戦ならばもっと九州に近いところの方がいいんだと思いますが、移転する利便性みたいなことも考えて、西日本でもわりと東寄りに機能を移していくと。この2ヶ所、全国を二分して登戸研究所の機能をそれぞれ分散して疎開していくやり方を探りました。

〔渡辺〕 私は小川分室というところを20年くらい前に関係者と一緒に調べたことがあります。そこが栗山さんの行ったところですが、どういうルートで行かれました？京都から行かれるわけですね、あそこは。

〔栗山〕 そうです。福知山線ですか、谷川駅で降りまして。

〔渡辺〕 小川村というところですね。そこにいつ行かれました？

〔栗山〕 昭和20年の5月頃だったと思います。

〔渡辺〕 5月頃。それでどういうところにお住まいだったんですか。

〔栗山〕 最初は軽工場が小学校の講堂を使いましたので、その前あたりだと思うんですけど、宗教団体の昼練道場という畳敷きの広い部屋がありまして、そこへ独り者は全員雑魚寝ですね。

〔渡辺〕〔写真を指し〕小川小学校という学校が工場になる予定だったんですね。今は鉄筋の建物ですが、これを造るわけですね。そうするとどういう形で工場造ったのかは御存知ないんですね。

〔栗山〕もう私らが行ったときは大体が据え付けてありました。木造の2階ですか、床をはがしてコンクリートを打って機械を据えたわけですね。ですからまだコンクリートが乾いていないような状態で、とても動かされるような状態ではなかったですね。

〔渡辺〕機械を運んだり、工場を造る途上で敗戦になるということですね。何人ぐらい行っていたんですか。

〔栗山〕ほとんど分散していますから、全然わからないですね。

〔渡辺〕関西では、村上さんという方が所長ですか。

〔栗山〕村上忠雄さんという、今、資料館があるところで研究していた人ですね。

〔渡辺〕その方が所長で、その他何人かの将校と何人かの雇員・工員みたいなかたちで行ったわけですね。それで機械を運んで、仕事は何をやる予定だったのでしょうか。

〔栗山〕一応、軽工場の工場長という人が竹下、という見習士官だったんですけど、まず顔も見たこともないですし、仕事をする状態ではなかったんですね、まだ。

〔渡辺〕陸軍の参謀本部の資料によると、ここに長野県に次ぐぐらい焼夷剤が送られているんですね。だから焼夷爆弾なんかを作る用意がされたんじゃないかとも思いますが、いかがですか。

〔栗山〕多分それは別の建物でやっていたんだと思います。

〔渡辺〕そんなかたちで栗山さんは徴兵にとられないで、第二総軍という西の方の守りの秘密作戦部隊として敗戦を迎えることになります。それでは、またあとでお聞きします。ありがとうございました。

次に正地次男さんをお願いします。正地さんが登戸研究所に入られたのはいつ、何歳ぐらいだったのでしょうか。

〔正地〕15歳ぐらい。1940（昭和15）年、太平洋戦争が始まるちょっと前です。

〔渡辺〕入るきっかけというのはどんな感じでしたか。

〔正地〕当時はよほど家が裕福でないと旧制中学は入ることができなくて、〔国民学校〕高等科というのが2年あったんです、〔現在の〕登戸小学校で。それから戦争がだんだんあれまして、就職という問題になったんですけど、最初は川崎にあります日本電気とか日本窒素（？）とかあそこらへんを受けたんですけど、みんな受かっちゃったんですよ。そのうちこの登戸研究所が入ってきまして、待遇がとにかく、給料がね、給料と言うと憲兵に怒られちゃうんですけど、手当ですね、それがなんか倍ぐらいくれるということ、さあ親もこれはいい就職だと言って、早速受けたんですけど、なんとか合格しまし

て。

〔渡辺〕 ということで、家族も喜ばれてここにお勤めされたんですね。

〔正地〕 そうですね。

〔渡辺〕 この場所っていうのは、どういう風に呼ばれましたか？当時、「役所」と呼んだり、「登戸研究所」と呼んだり、「第九研究所」と呼んだり、いろんな呼び方があったようですが。

〔正地〕 いや、最初私が入るちょっと前はなんか「実験所」っていいましたよ。

〔渡辺〕 実験所。

〔正地〕 登戸実験所。そのうちに技術本部ですね、陸軍技術本部。第七研究所…。

〔渡辺〕 第九ですね。

〔正地〕 とても短くて一年か一年半で今度、兵器行政本部ってなったんですね。やっぱり秘密をあれするんでいろいろ名前変えたみたいな感じだった。

〔渡辺〕 「登戸研究所」っていう名前は日常的に使っていました？

〔正地〕 いや、普通は使ってました。

〔渡辺〕 「登戸」, 「登戸」で。

〔正地〕 いちいちあの「第七」とか「第九」とかってあまり使わないですね。最後は「第九研究所」になったんですかね。

〔渡辺〕 それでその、どこに属するかというのはいつ決まったんですか？

〔正地〕 それは、身上調査とかいろいろしましたよ。私の実家にも二度三度憲兵が来たりしてね。それで、三科に入るのは、成績ばかり良くても、家庭がちょっと複雑だと入れないですよ。私なんかわりと順調で、入れましたけれども。

〔渡辺〕 その、三科に入ってどういう部署かっていうのは、入る前は全然わからないままなんですね。

〔正地〕 ええ、わからないですね。入って半年くらいは兵器学校の真似事みたいな勉強をずっとやっていたんですけど、だんだんと戦争が激しくなって、本当は2年間やれば兵器学校の令状がもらえるっていうことだったんですけど、半年ちょっと過ぎるともう中止だっていうんですよ。それぞれ現地室に配属になるから、そちらでよく働け、ということとで。

〔渡辺〕 それでその場所ですけれども、〔地図を見て〕ここでもよろしいでしょうか。ここが本館ですが、第三科の南方班っていうのは〔地図の〕一番下の方、この辺でもよろしいですか？

〔正地〕 そうですね、南方班はね。三科は北方班、中央班、南方班ってあったんですよ。で南方班っていうのは今の〔川崎市水道局の長沢〕浄水場のある所と近い方なんですよ。一番南側なんです。で、北方班というのは紙工場で。それは北側だったんです。



〔渡辺〕〔南方班の位置の内部を指し〕ここが5号棟という、これですね。これが印刷ですね。どこで働いたんですか。ここに印刷機がいっぱいある。

〔正地〕唯一塀があるところですね。そこは使ってなかったもので、そこは検査の場所に使ってました。そこへ、わりと空いてるところがあったんで、中野学校を出た、スパイ学校ですね、あそこの生徒が卒業すると研究所へどんどん入ってきた。当時三科へ入ってたんですね。

〔渡辺〕ここらへんは板塀で囲われたという。

〔正地〕そうです。三科だけは板塀でね。

〔渡辺〕3メートルぐらい。

〔正地〕絶対よその科の者は入れないです。所長でも断って入れないってほど嚴重にあれしたんですね。

〔渡辺〕それで、偽札というのはどんなものを造られていたか、ご記憶はありますか。こういうやつですか。こちらの写真を見てみてください。

〔正地〕そうですね、中央銀行〔券〕ね、孫文の肖像。あと中国銀行〔券〕。交通銀行〔券〕ね、これは最後までやりましたね、交通銀行は。

〔渡辺〕これが一番大量にやったという。

〔正地〕いや、大量に出したのは中国銀行。上海の銀行ですね。それがピン札だとね、上海で、ばれそうだっていうんで、すぐ参謀本部から通達が出てね、中止になったんですよ。それで今度は交通銀行、これを古い札にして至急送れってなったんですよ。それで、それを印刷した新しいのをわざわざ古い札にね、コンクリートミキサーの中へくちゃくちゃにした札を入れて、中に糠入れたり、あと土も入れましたね。それから中を掻き回してみると使ってきた札のように見えるんですよ。それをシワが寄っているんで、手が足りないんで学徒動員で女学生を10人程、高津女学校と用賀にあった清和女学校、ここに10人くらいいる。私が全部指揮したんですよ。それで一度伸ばして、それを今度一回プレスにまたかけて、それを今度百枚ずつね、それはもう、番号は連番でなくてそのまま、そうして送ったんですけどね、上海へ。

〔渡辺〕それで後で調べて見ますと、1940（昭和15）年にピン札で日本の特務機関が中国で使ったら、偽札が出てるってばれましてね。なんでかって言ったら文化の違いで、中国の場合は新札を日本のように一万円札を新しいままで使わないらしいんですよ。くしゃくしゃにして使うらしい。それで偽札だって言われたっていうので、古札仕上げって工程を入れるんですよ。こちらでね。だから古札仕上げの工程を指揮されたのか。

〔正地〕私は最初、検査室の方へ配属になったんですけど、検査も大変だったけどそういう直々にね、命令が出るんですよ。それでなんか上海の方でいろいろ問題が起きたらしくて。

とにかく、盛りな頃は、鉄道の国鉄時代ですけど、あれに一車ずつ送ったんですから。あれいっぱい積み込んでね。

〔渡辺〕 結局、運びたいのはちゃんとうこう…

〔正地〕 梱包箱ね、あと、縄を何重にもかけてね。それで登戸のあのマルツのあそこから、長崎までですよ。それにまた一回ついて行けっていうんでね、大変だったんですよ、貨車の中で。窓もないしねえ、時々開けてね、空気吸うような。嫌な役だった。

〔渡辺〕 運ぶときの指揮をするのが中野学校出身の人ですね。その人の下でついて行って。

〔正地〕 うちの部屋にね、5人くらい来てましたね。あの時代はね、男はもうほとんどで丸坊主。

〔渡辺〕 坊主刈りでしょう。

〔正地〕 でも中野学校の人たちはね、ポマードを付けてね、長髪でね、背広着てね、本当にうらやましかったですよ。ああいう格好してみたいなって。

〔渡辺〕 それで、あそこからトラックでずっと運んで、あの弥心神社の下の道路を歩いていくわけですね。

〔正地〕 そうですね。

〔渡辺〕 それで作った額が45億円〔元〕も刷ってるわけですよ。

〔正地〕 そういう計算になるのかわからないですけども。

〔渡辺〕 30億円〔元〕くらい使った、という史料もあるんですが、45億円〔元〕というと、偽札の主流だった10円〔元〕札で1枚1枚重ねていくと富士山の27.5倍くらいの量があるんですね。それを毎日毎日包んで運んだんですかね。毎日のように。どうだったんですか。

〔正地〕 最初のうちはね、紙幣というのは凹版印刷とか凸版印刷とあって、凹版印刷がね、なかなか生産があがらないんですよ。〔凹版印刷〕手ふきでやるんですよ。それで香港にあるっていうんで、参謀本部でね。どうして持ってきたか知らないですけども。

〔渡辺〕 第三科所員の大島〔康弘〕さんなんかは御存知ですか。お付き合いとかありましたか？

〔正地〕 大島さんは中央班で、私は南方班ですぐ隣だったんですよ。で、私の仲いい友達が、大島さんのところにいたんですよ。で、時々遊びに行ったり、来たりしていました。

〔渡辺〕 それで、他の科と違うのは、特務機関ですから、使っても軍事物資を買い取ったりするわけでしょう。だから、結構裕福になって戻ってくると、お土産なんかを持って。

〔正地〕 ああ、はい。それが楽しみだった。

〔渡辺〕 どうだったんですかね。やっぱりそうだったんですか。

〔正地〕 札入れて送った空箱へね。当時日本にはね、ほとんどチョコレートだとかああいうお菓子類はほとんどない時代、もちろんウイスキーもない。それを特務機関の、中野学校

を出した人たちがね、梱包の間、梱包箱へ、偽札で買ったんでしょけどね、もちろん。ウイスキーとかチョコレートを送ってくれたんですよ。それで表を見るとね、「参謀本部軍務局〔ママ〕 御寄進」という判子が。警察もそれは手が出せないんだね。で、開けてみるとチョコレートがおいしそうで。みんな喜んだんですけど。

〔渡辺〕 その、阪田誠盛というのが中国で指揮してね、儲かるわけですね。それを持ってきた中野学校の人たちが戻ってくるとその売り上げをくれたと。

〔正地〕 そうですね。

〔渡辺〕 他の科の人とは全然態度がちがう…

〔正地〕 その点はね。

〔渡辺〕 それから、他の科の人とも一応、所内で会うことがありますが、ほとんど口を聞いてはいけなかったんですか、やっぱり。

〔正地〕 うん、まあ、聞かれても話しちゃいけないと。

〔渡辺〕 それでは、家でもほとんどそれについては。

〔正地〕 家族にね、絶対息子のやっている事を聞くな、っていう承諾書を書かされる。判を押して。だから、親は震えあがったけど憲兵が来てね。お国のためならっていうんであれしたんですけど。

〔渡辺〕 もう一つ他の科と決定的に違うのは登戸研究所に入られてから19歳になった時、今から70年前になると、徴兵検査がありますね。それで合格されますね。そのときどういふふうな処置があったんですか。

〔正地〕 前にも一度お答えしたことがあるんですけど、私らの頃から、それまでは20歳で徴兵検査だったのが、一年外して19歳で。一応、研究所に行ってたんだけど受けた。やっぱり甲種で合格したんだけど、研究所に行ってるから召集なんか来ないよ、っていう話だった。ところが赤紙が来ちゃった、私の所に。それで、川原〔広真〕中尉だったかね、すぐそれ持って相談に行ったんです。

〔渡辺〕 相談に行った。

〔正地〕 そしたら、すぐね、「ちょっと待て」って言ってね、横浜の連隊区司令部ですかね、あそこに電話を入れましてね、「この間発送した召集令状、正地次男っていうのは重要な任務に就いているんだから、そんな兵隊なんかにとられたら困る」っていうんです。反対に連隊区司令部は「そうですか」って言って、まだ階級もこっちは大尉か中尉ですから、「結構」って、「じゃあその令状をないことにして返してくれ」って。もうあのときは驚きましたね。

〔渡辺〕 だから兵士にも行かなくてよかったんですね、三科は。

〔正地〕 言い方もすごいですよね。「兵隊行って1年や2年やって国のために何になる。今正

地君は重要な仕事に就いている。参謀本部の仕事。おまえら口出しすることじゃないからそんなもの取り消せ」って。そのまま向こうも引っ込んだんですね。

〔渡辺〕 それほどだから偽札と言ってもお札を刷るのが重要な兵器だったということですね。その関係で他の場所に移動することができないものですから、半分は製紙部門を中心に移動するけども、最後の最後までここで刷り続けるわけですよ。8月まで。何日ぐらいまで刷っていました？

〔正地〕 前日までやっていましたね。

〔渡辺〕 8月15日〔ママ〕までここで偽札を造り続けた。それで8月15日の朝早く、証拠隠滅命令が出されますね。そのときどんな感じでした？

〔正地〕 私なんかは下っ端ですから別にそんなこと恐がらなかつたんですけど、将校だとかは戦犯に関わる、これは一切わからないように隠滅しなくちゃだめだ。それで焼却。古い札、合格品もたくさんあったんですけど、それを全部焼いてしまえと。ちょうど四科と三科の間に谷があったんです。そこへ持ち込んで。最初燃えないんですね、固まった札は。それをはがして、油を染み込ませて、石油ですね、それを撒いて燃やしたんです。

〔山田〕 このあたりですかね〔地図を指しながら〕。

〔渡辺〕 今の三田小学校のあるあたりですかね。

〔正地〕 三田団地のこっち〔東〕側ですね。

〔渡辺〕 そこに埋めたわけですか。

〔正地〕 いや、完全に燃えないんですよ。きれいには。灰になっても見ると、札の模様が出ちゃって。それで将校連中が怖がってこのままではだめだ、川へ流そうということで多摩川へ流しに行ったことがあるんですよ。カマスと言ってわらで編んだ袋へ詰めましてね、それで夜、今のちょうど登戸の橋があるところ、当時あの橋はなくて、小田急の鉄橋があったんですけど、あれの陰側で。そこで洪水や大水のときに流したらあんなことないんだけど、普通のときに流しちゃったでしょ。夜だから水がどのくらいあるかちょっとわからないんだよね。とにかく命令だから全部流しちゃった。そしたらそのすぐ下にね、今でもダムがありますけども、昔のことだからあの時代は蛇籠といって竹の籠でそこへ玉石詰めて、それで堰にして川崎の方へ送る二ヶ領用水の水を流すんだよね。私が上からの命令で「お前、あの辺近くて詳しいから、札のカス、燃えカスがどうなっているか、堰行って見てこい」って言うから、〔見たら〕蛇籠の中にいっぱい入っちゃって。焼けたのも焼けずにいたのも。それですぐ報告したんですけど、そしたらすぐ中止になった。川はダメだってなって。洪水でも出てないと。あとは湘南海岸、海に流そうと。ちょうど江ノ島と鎌倉の間ですね。腰越というところがあるんですよ、漁師町でね、その海岸へ行ってね、〔偽札の灰を〕流したんですね。海だから波があるから川とちがっ

てね、安心だったんですね。そんなことありました。

〔渡辺〕 そういうふう徹底した証拠隠滅をやった。何日ぐらまでやりましたか。

〔正地〕 終戦が昭和20年。21年明けまで。我々は何でもないですよ。ただ将校連中が怖がってね。軍事裁判で私がB級になる、A級になる、そんな話ばかりしてましたね。

〔渡辺〕 それじゃ、悪いことやったという意識はあったんですね。将校は。

〔正地〕 ありましたね。最初はわからなかったんですよ。ところがいろいろ情報が入ってくるんでね。とにかくあの当時、支那派遣軍総司令部が上海〔※資料館注 南京の誤りか〕にあったんです。畑俊六という人が大将でね。そこに特務機関と言われる特殊なね、中野学校を出た連中が関係してる。上海にあったんですよ。情報関係は兎玉誉士夫というのがやってた。そういう人ですよ。それから物資の阪田機関ですね、阪田さんという人が。私なんかを阪田さんがそれでそこで品物買ったりね、いろいろやったんですね。阪田さんが研究室一回来たことがありまして、そのとき「大陸に現在、満洲を合わせて35万人の兵隊がいるんだ。その食糧を買うのをこの札で買っているんだ。札が不足して兵隊が飢え死にしちゃうから、徹夜でも生産上げろ」と命令が来ましてね、きつかったですね。

〔渡辺〕 どうもありがとうございました。ここが〔航空写真を見ながら〕南方班ですね。

〔正地〕 そうですね。北方班が紙工場で。中央班に大島さんがいた。

〔渡辺〕 北方班ですが、ここが製紙をする場所で、透かしなんかする。この場所で働いていた方が今日お見えなんです。今日は証言の方には立ちませんが、そこで短い期間ですが働いて、戦後も山本〔憲蔵第三科長〕さんなんかとも付き合いのあった岸井三治さんがお見えですので、ご紹介だけします。今度、ぜひ岸井さんのお話を聞く機会を設けますので、よろしく願います。今度楽しみにしています。岸井さんは岸井さんですごい話をお持ちですので、楽しみにしていただければと思います。それではどうもありがとうございました。

それでは次に會津さんの方に移ります。會津さんは何歳でいつここに入所したんでしょう。

〔會津〕 そうですね、14ですか。14か15です。登戸国民学校高等2年卒業して、4名でここへ来て、4名が受かって、一科、二科、三科、四科と。私が四科で配属になって。

〔渡辺〕 昭和19年4月に入所されたと。

〔會津〕 4月1日ですね。

〔渡辺〕 それですぐに配属されないで。

〔會津〕 三ヶ月見習教育で青年学校で軍事教練ですね。そして7月に四科に配属になった。

〔渡辺〕 四科ではどういうことをされてましたか。

〔會津〕 ここに見本〔模型〕があるんですけど、これは今、市販されている羊羹の形をしていますけども、これはブリキ缶でできていて、この中へ爆薬を詰めて、それで導火線が4尺くらいついていて、下にはねる雷管がついている。それで作ってました。あとは缶詰、これは鮭缶のような缶ですけども、このなかへやっぱり火薬を入れて、導火線をつけて使っていた。そういうことですね。

〔渡辺〕 缶詰型爆弾みたいな。

〔會津〕 そうです。火薬で破裂するということですね。

〔渡辺〕 缶詰型爆弾なんかは四科で作られていました。その威力なんかを実験するためのこともやられていましたよね。

〔會津〕 これは多摩川の河原で実験があったんですけど、私はまだ見習工だからしてません。上の人とか将校が行っていたと思いますけど。

〔渡辺〕 今、見習工と言われましたが、その若かりし頃〔少年工時代〕の會津さんの写真〔本誌P.61,第26図〕をちょっと見てみましょう。こんな感じなんですね、本当にこういう子が登戸研究所に勤めていたということ自身が脅威ですよ。本当に中学校の年齢で爆弾作りをやっていた。それで、ここに入っていた証拠写真みたいなものもあります〔登戸研究所勤務工員のバッヂの写真〔同,第27図〕を指して〕。これをちょっと説明してください。

〔會津〕 これは〔研究所に〕入ると皆さんがもらったんです。これは工員用で、この裏側に数字が彫ってあり、私が666番なんです。だからこれは666人目の私はそうだったんじゃないかと思っています。その上に雇員という身分があったんですね。詳しいことはわかっていません。

〔渡辺〕 こういうバッヂがあったという話は聞いていますが、現在残っているのが會津さんのバッヂしかないんです。ですから大変貴重なものだというふうに思いまして、復元して資料館に展示をさせていただいています。それで、若かりし頃に登戸研究所というものに対する、家族とかご本人の思いはどうだったんでしょうか。

〔會津〕 うちの周りには研究所が近かった関係で大勢いたんです。私が一番下だったと思うんです、年齢的には。有名な人はみんな亡くなっちゃっているようです。歳からいって。だからこういう席に出る人もいないわけですね。大勢いたんです、近所には。

〔渡辺〕 登戸小学校だけでも同期だけで4人ですよ。先輩なんかも入れると結構登戸にいっぱいいたわけですね。それでそういう人たちは登戸に勤めているからお互いに道で会ったりすると「おまえ何やっているんだ」と話はできました？

〔會津〕 だけどそれが今言ったように秘密の工場ですから、こっちも聞きもしないし、ここでも聞きません。

〔渡辺〕 だから勤めていると分かっているけど、別にその内容はお互い交流とかは絶対しない。家でもやはりお話しは？

〔會津〕 しなかったです。それに空襲警報が鳴ると、登戸と生田ですね、夜中でも自分の職場へ駆け付けたんです。それは今でも覚えています。

〔渡辺〕 勤めていたときに、機銃掃射とか、遭われたことありました？

〔會津〕 私はねやっぱり、研究所だったかどうかはわかんなかったけれど、今の向ヶ丘遊園駅ですね、近くの家には弾の当たった痕があったんです。

〔渡辺〕 會津さんが勤められた四科というのは、現在の生田中学校の場所が一班、こちら側〔現・明大生田キャンパスの側〕に二班、〔二班は〕正門入ってすぐ右手の建物で爆薬とか、そういうのをやられたわけですよね。四科は分かれていたってことですよね。勤務はやっぱり八時半くらいからだったんですか。

〔會津〕 そうですね。7時か8時で、終わりが6時だったんですかね。それであと忙しい時は残業。残業は8時くらいまでやったんですかね。タイムレコーダーがあったんで押して帰ったんですね。

〔渡辺〕 正地さんと同じように、給料が良かったとか条件が良かったとかそういう気持ちってありますか。他に行くよりは。

〔會津〕 その当時は遊んでいる人間はいなかったから、勤めている上ではまあ良かったんじゃないかと。中に食堂もあってご飯も食べられた。酒保〔兵営内・艦内にある兵士相手の日用品・飲食物などの売店〕もあって、街中では売ってないものも売っていた。それから床屋さんがあって、床屋へも行けた。不自由はしなかったですね。

〔渡辺〕 これは今度、岸井さんから聞くときもまた出るかもしれませんが、講堂なんかで、エンタツ・アチャコとかが来て、演芸会をやるとかいうのがあったんですけど、ご記憶ありますか。

〔會津〕 これはね、毎月1回、第一講堂っていう講堂があって、そこで映画を観て、その後落語なんかを聞いたことを覚えていますね。

〔渡辺〕 戦争中の昭和20年にそういう演芸会とかまでやっていたのがこの登戸研究所だなんていうのは驚くべきお話だと思いますが。そういう意味では空襲で命の危険を感じたことは、ここに勤めている限りはなかったわけですね。

〔會津〕 ここ山だったから笹藪のなかに防空壕が、個人防空壕といって、幅が1 mくらい高さが1 m50くらいで、一人一人の防空壕を皆掘って持っていたんです。

〔渡辺〕 そんなことで四科のなかで本当にまだ少年の盛りのときに登戸研究所に勤められた、しかも爆弾を作ったということを今紹介していただきました。それではまたあとでうかがいます。ありがとうございました。

それでは三上峰緒さんに移ります。三上さんの場合は登戸研究所ではないので、それについて山田先生に補足していただきます。

〔山田〕 三上さんのお勤めだった陸軍兵器行政本部というのは、あまり一般的に知られていないかもしれません。兵器というのは、まず開発するところ、陸軍技術本部っていうところがあります。そして兵器を製造する、兵器廠という工場があります。そして、どの兵器をどれくらい造るのかと予算配分をしたり、重点を決めるところがあります。これが陸軍省の兵器局というところなんです。そういう開発・生産それから予算配分というのを一元化しようとしてしました。つまり戦争が始まって、いろいろと簡素化しなきゃいけない、合理化しなきゃいけないということで、1942（昭和17）年に、今言った陸軍省の兵器局と、それから陸軍兵器廠、この下に工場があるわけですが、そして更に陸軍技術本部が合体して、陸軍兵器行政本部という組織になったんです。登戸研究所も、この陸軍兵器行政本部の下に位置していて、この陸軍兵器行政本部ができたときから、登戸研究所は第九陸軍技術研究所っていう名前になるんです。ですからいろんな陸軍の研究所も、基礎研究をやっていた陸軍科学研究所系統の研究所と、陸軍技術本部に属していた実際の兵器を開発するところと2系統あったんですが、それが完全に一本化されて陸軍兵器行政本部の第一から第十までの技術研究所、登戸の場合は第九陸軍技術研究所という組織になったんです。ですから登戸研究所を監督しているところがこの兵器行政本部であるということになります。

〔渡辺〕 そういうところに勤められた三上さんが、何で登戸に関係するのかというお話を聞きたいと思いますが、最初に何年に兵器行政本部にお勤めだったのでしょうか。何歳くらいだったのでしょうか。

〔三上〕 大体1942年頃に、タイピストとして陸軍兵器行政本部、陸軍技術本部の方に試験を受けて入りました。タイピストで入りましたけれど、それから1年くらい経ってから、それまではほとんど技術の製図の方ばかりが周りにいて、私たちは庶務でタイピストをしていました。そのときは私一人だけがタイピストで、他に別館とか製図室とかいろいろありましたけど、そこの方にもみんなタイピストがいたんですけど、兵器行政本部へ変わってから、それが全部合併して、製図の方たちもいっぱいいたんですけども、みんな散らばって解んなくなっちゃって、タイピストだけが13人の部屋に残ったわけ。その13人の部屋のタイピストのときはものすごい忙しくて夜勤なんかもあったんですね。そしてタイプでもってそれが始まったら13人の音ですから、もうガチャガチャ凄いな音がして、耳鳴りするほど大きな音でタイプが大変だったんです。あとは、戦争で、5月25日に…。

〔渡辺〕 そのことはちょっと後で聞きます。場所はまず、戸山ヶ原周辺っていうのは、軍隊のあらゆるものがいた場所ですよ。その場所の百人町の辺がお勤めだった場所ですか。



〔三上〕 そのときも朝の朝礼のときなんかありますと、朝礼は朝早くからみんな、朝礼が終わったらすぐ剣道の面をさせられて、毎日毎日剣道を、女性でも男性でも構わない。もう全部がとにかく鍛えるために。そして敵機が来襲してきたら自分たちを守るんだという感じで、毎日剣道をやらせられました。女性でも全部やらされました。

〔渡辺〕 向こうに何人くらいお勤めでした？

〔三上〕 当時は400人だと思うんですけど。

〔渡辺〕 これがそのときの兵器行政本部時代の写真ですね。三上さんがあそこの上の方に。女性が結構いますね。

〔三上〕 女性もいっぱいだから、製図室でいたわけですよ。製図を作ってやっていた。そしてうちの方の製図は、点検をする場所で、あちこちからいろいろなものが製図が出来たものをここで全部点検して、女性もやっぱりその仲間に入ってやっていました。私なんかはタイピストで製図のことは何にもわからなくて、いろんな銃砲だとかいろんな機械班だとかいろんなのがあって、そのなかのタイプを打つんです。タイプを打つんでも、今考えると三八式野砲だとかそんなのが書いてあったけど、なにがなんだか訳わかんなくてタイプ打っていました。あと、銃器関係の方が多かったので、戦争の方の機械班だとか銃砲だとか、そういったものの中味は何にもわからなくて。それから、科学研究所っていうのも、何にも分からなかったし。そこにあったということも知らない。それで、技術本部と科学研究所が合併したっていうことも、あんまり知らされてなかったから、何のために行政本部ができたのかなって思っていました。

〔渡辺〕 科学研究所って隣に建物あったんじゃないですか。ご認識ないですか。

〔三上〕 私たちのところは駅のすぐそばなので、そっちの方はあんまり行ったことがないから、戸山ヶ原の方は行かないんです。

〔山田〕 この百人町、ここにですね、陸軍科学研究所と陸軍技術本部というのが隣り合わせにあったんですね。科学研究所っていうのは兵器の基礎研究をやるところで、技術本部っていうのはそれを具体的に兵器にしていく仕事をしていたところなんです。ですからまさに基礎研究と応用研究と、そういう二本立てであったんですね。三上さんがお勤めだった制式課っていうですね、これはちょっと聞きなれない名前なんですけど、この制式という言葉は、要するに技術開発して兵器が出来ますよね、これを量産する体制になったときに、それを制式兵器というんです。この字を使うんです。陸軍に採用されて、これから量産されていく兵器を制式兵器というふうに言って、ここで三上さんのこの課で図面を作ってそれに基づいて製造が始まるという、まさに陸軍のすべての兵器の設計の元締めみたいなですね、そういう存在がこの制式課というところ。

〔渡辺〕 そんな関係で、陸軍というと男性ばかりの職場かと思うと、そうではなくて女性が結

構いたということも分かりましたが、そこが、5月に空襲を受けますね。その状況をちょっとお話し願えますか。空襲ですね、5月25日の。

〔三上〕 空襲ね。5月の25日のときは私たちは毎日毎日、もう毎日B29が来ますから、毎日その支度をして寝るんですよね。支度をして寝るっていったって、ゲートルはいて、それこそ逃げる支度して。雑のうのなかで足腰はそこへ入れておかないと駄目なんで、そのなかに必要なものだけ入れて、そして逃げたりして。とにかく上から焼夷弾がものすごく落ちてきますから。焼夷弾が六角棒みたいだね。ものすごく輝いて見えるのが大きく固まっておっこちてきて、それが破裂しますと、油脂が出てきて、途中でみんな跳ねて流れ出ると、みんな焼け焦げて死んでしまったり。だからなるべくそういうところに、ほとんど私なんかも水のなかに入ってたんです。そして布団を一枚被って、その上から防空壕の方たちが水をかけてくれて、それでその上に…とにかく水のなかに入って川のなかに入って、そこにみんな「ちょっとでもいいから頭入れてください、頭入れてください」って言うと布団ですからみんなが入りきれないんですよね。だから、出た人はそのまんま直撃を受けて死んでしまったりなんかして。だから周りでもいっぱい死んだ人がいて。あとはもう朝まで爆撃をくらっていましたから、そのまんま私は自分の家の方に行って、うちの兄がちょうど隣組の組長をやっていたから、その組でまとめて第六小学校へ逃げたんです。第六小学校に一応避難して、食べるものはないし、なんにもないし、みんなお腹は空いてもなんにもない。何も持ってきてくれない。そんな状態でいましたら、キウチさんね、あの方がね、お弁当をね、すごく持ってきて。狛江のキウチさんです。その方とはもう仲良くしてもらったから、それで焼跡に施設が建ったんですね。それで、みんなを引っ張ってくれて、本当にありがたいと思います。今でも。

〔渡辺〕 そして翌日に登戸に皆さん、健康な人は疎開してくるわけですね。その状況をちょっとお話しください。

〔三上〕 ほとんどの方が皆疎開するっていったって、私たちはもう陸軍に行くことしか考えてなかったです。それから、うちの兄たちとか近所の人たちはみんなもうバラバラで、地方に自分たちの疎開した場所に行っちゃっていなくなって、私は陸軍のキウチさんのお家にお邪魔して、そこで寝泊まりして、登戸研究所を紹介してもらって、それからキウチさんと一緒に通うようになって。

〔渡辺〕 そのときは登戸という部分に異動するというようにお聞きになりました？あるいは聞かないまま？

〔三上〕 登戸の〔研究所のことは〕知らないでキウチさんに連れて行かれて。それで研究所に行ったんです。

〔渡辺〕 どこかわからないままここに来て。

- 〔三上〕 もう、連れて行ってもらうままに、とにかくそこへ行きましょう、ってことで。
- 〔渡辺〕 それで、場所は、本館とヒマラヤ杉がありますが〔地図を示しながら〕、三上さんがいうのはこの辺り〔本館北側〕のところでしょうか。
- 〔三上〕 一番よく分かっているのが、弥心神社っていうところ。そこをいつも通るんで。この弥心神社なんかはもう私、涙が出そうになるくらいね。
- 〔渡辺〕 そこから入った近くですね。
- 〔三上〕 ええ。そこから入って行って、それからヒマラヤ神社っていうのはもっと先だったですよ？
- 〔渡辺〕 ヒマラヤ杉ですか？
- 〔三上〕 ヒマラヤ…ヒマラヤ杉っていうんですか。その間辺りに兵舎があって、そこで機銃掃射を受けた。
- 〔渡辺〕 機銃掃射を受けたわけですね。
- 〔三上〕 それで、とにかくみんな一応はここに集まったんですよ。200人いる人たち全員じゃないけども。来れない人もいた。その人たちは全部、小金井の方にね、全部制式課の人だけ、全部ほとんど行っちゃいました。残ったのは庶務の人だけで何人もいなかったです。そのなかに私とキウチさんはいつも一緒だったから、よくわかるんです。そうして、そういう人たちの人事ですよ、私はそれを受けて打つだけだから。キウチさんはもう大変だったみたい。
- 〔渡辺〕 登戸研究所で実際に作業している北方班というのは北のほうと、南方班っていうのは解散しないでここで仕事をされてるんですね。それで、通信をする部隊も本館を中心にあってそこにいるんですけども、他はみんな疎開してガラガラになったものですから、そこを使っていたんだと思うんですね、三上さんはね。そのときに登戸研究所の例えばタイピストの方なんかいらっしゃいますね、交流とかはありました？話したり、食事したりする機会っていうのは。登戸研究所のタイピストの方と。
- 〔三上〕 なんかそういうこともなかった…
- 〔渡辺〕 登戸研究所のタイピストの方でお名前をご存知の方とか、いらっしゃらないですか。
- 〔三上〕 あとは、イトウさんという人が南方班ですね。それから、カワセさんっていう人が事務のところの人だったんですね。
- 〔渡辺〕 それは兵器行政本部から一緒に来られたということですか。
- 〔三上〕 そうです。でも私とは別々に後からみんな来たから、全然わからなかった。わからなくてみんな来ていましたよ。
- 〔渡辺〕 それでは、仕事はどういうことをされていたんですか。ここでもやっぱりタイプだったんですか。登戸でやっていた仕事はタイピストとして…

〔三上〕 タイピストなんですね。

〔渡辺〕 タイプはあったんですか。

〔三上〕 タイプはね、一台だけあって、それを私がやっていたんですよ。ですから、他の科の人の「これをちょっと打ってください」なんていうのがあったんですよ。

〔渡辺〕 敗戦になるとき、そういうものについて、処分というのはどういうふうにされていたんですか。証拠隠滅とか。やっぱり命令は出ました？

〔三上〕 敗戦の時もね、あんまりよく分からなかったんですよ。それで、ただ集まってくださいという感じで、別に大々的に集まったわけではない。少ししか人数いませんでしたから、将校と下士官と私たちぐらいと何人か集まって、そのときなにかザワザワザワザワ言っていて、何言っていたか訳がわからなくて、戦争が終わったということも分かってない。

〔渡辺〕 それでも戦争が終わった後はここに実際に来なくてもよくなったんですか。

〔三上〕 終わった後は、将校たちが、「今戦争が終わったんだ」って言って、それで「終わったの」って言って、手を皆で握りしめたりなんかして、「これからどうしよう」ってなった感じだったんですね。皆さんはこれから戦争が終わったら今度仕事もなくなって、それがすごくみんな心配だったみたい。私が8月の15日にうちの親戚の人が美容院をやっていたんです。それで、護国寺の前の所に焼け跡があって、そこに早々と支度をして始めるんだっていうときにうちに話が来たの。そしてうちの父が「これからは平和な時代なんだから平和なものを選んだ方がいいから」って言われて、それで美容師になって。だけど学校もないし、何にもなくて一応入って、学校がないから徒弟制度ですよ。なかで勉強して、いろいろ教わって免許を取ったんです。

〔渡辺〕 ありがとうございます。時間も15分ちょっとですが、お一言ずつ。戦後40年くらい沈黙されるわけですね。誰にも話さないで。今こういうふうに語って、伝えたい思いみたいなものがなんなのか、一言ずつ、もう一回お願いしたいと思います。まず栗山武雄さんから。

〔栗山〕 戦後長い間登戸研究所にいたことを公にしなかったことは、我々の時代の人は大変だったと思うんですけど、新聞などで渡辺先生がこの保存運動をされていることを知りまして、それから、新聞を読むようにして、こんな立派な資料館を作っていただきましたことを、ここで若いときを過ごしました者として非常に感謝しております。

〔渡辺〕 それでは、次に正地次男さん。

〔正地〕 先ほど、向こうの方から機銃掃射を受けたという話があったんですけど、私が経験しているなかでも3回くらいグラマンが機銃掃射をかけてきまして、私の同僚が1人足を撃たれましてしばらく医務室であれしてましたけど、この場で皆さんにお話したいのは

そのグラマンがちょうど三科と四科の谷間から上がってくる。四科に4ヶ所くらいに監視がいたんですけど、全然気がつかないんですよ、グラマンが来たのに。谷間からこう上がってくる。それでそのときにね、余分な話ですけど、ビラを撒いてくるんですよ。そのビラをね、私大事にとっといたんですけど、その後誰かが忠告したのか、憲兵が、私知らないって言いましたけどね、みんな持っていかれたんですけど。そのビラで言えば、私、そのビラを見たときは「アメ公が何言ってるんだ」というような気持ちで何も信用していなかったんですけど、後になったら全部本当のことですね。原子爆弾という特殊爆弾が今度できて、大型重爆撃機が一気にグアム島から東京を一周して楽々帰ってこれる。それで今降伏しないと日本は全滅するっていうわけ。それでその後、その爆弾を一度使うんで、中小都市に一発落としてみるって。それが広島ですね。後で考えたら嘘言っていないですよ。私もそれは感心しました。そのときは「何言ってるか」というような感じだったんですけど、それ大事に取っとうと思ったけど、取られちゃってね、憲兵に持ってかれちゃったんですけど。その他にね、ビラに書いてあるのはね、「日本中攻撃するけれども、降伏しなければね、京都だけは攻撃しない」と言っていましたね。なるほどね、京都にはなにも来ませんでしたね。それで、その当時にはちょっと私も信用していなかったんですけど、これでもし降伏すればね、アメリカとロシアが戦勝国で、ロシアが強く主張してるのは、朝鮮だとかドイツみたいに、北と南と東京を中心に分けて、北の北海道と東北はロシアが管理する、そして南はアメリカがやる、そんなことをビラに書いてあるんですけど、確かにね、本当具体的に、なるのかなあと心配したんですけれども。とにかく、アメリカという国は紳士の国ですね。私つくづくビラでわかりました。決して嘘一つも言っていないんです。日本の大本営なんかでたために戦果を発表してね、あるいは国民は惑わされますよね。そのくらいのことですけども。

〔渡辺〕 どうもありがとうございました。それでは會津保進さん。ずっと話さなかったことを話せるようになったお気持ちを。

〔會津〕 私は今、町会の老人会に入っているんです。そうすると話になると決まったように元気で長生きという話になるんです。これは私は今は平和な時代ではいいことだなあと。思って。それともう一つ、戦後生まれの人は幸せだなあと。思っています。それだけです。

〔渡辺〕 戦争のないことがいかにいいかということですね。三上峰緒さん、いかがでしょうか。

〔三上〕 私は今までも戦争が、生まれたときから戦争ばかりやってきましたから、本当に平和な時代をこれからも皆さんも、平和、大事にして長く生きていきたいと。思います。どうもありがとうございます。

〔渡辺〕 どうもありがとうございます。それでは山田先生からまとめをして、質問があれば一言。

〔山田〕 皆様からなにかこの際ですね、前の4人の皆さんに聞いてみたいということがございましたらご質問をどうぞ。時間の制約もございますけれども、今マイクを持ってまいります。この際なにか聞いてみたいという方はいらっしゃいますか。

〔質問者〕 この戦争は負けそうだったのはいつ頃ですか。また、そういうことは全く考えてもみなかったのでしょうか。

〔山田〕 どうでしょうか、今のご質問、戦争負けるんじゃないかと思ったのはいつ頃ですか。あるいはそういうことは考えませんでしたか。

〔正地〕 私の感じでは1943（昭和18）年後半からちょっと日本はね、このままいったら大変なことになるなと思いましたね。それは宣伝ビラがね、本当に具体的に実行されるんで、私ね、これはもう。私それでね、余分な話になるんだけど、調布の飛行場ってあるじゃないですか。そこにね、日本にはまだ飛行機がたくさんあるんですよ、戦闘機が。それを見に行こうって1回行ったらね、中野学校出た人だと思うんだけどね、よくそばへ寄って触ってみろって言うんですね。そしたら並んでいる戦闘機が黒く塗ったベニヤ板なんですよ。これを見たときね、もう日本はだめだと思いましたね。上空からB29が来てね、写真撮って、まだ日本には飛行機があるぞって。だからまだ攻撃かけようということですね。だからむちゃくちゃな戦争ですよ。そのときそう思いました。以上です。

〔山田〕 どうもありがとうございます。だいぶ長い時間にわたって4人の方に伺ってまいりました。

今の皆さんの証言も活かしながら、後半の企画展を準備していきたいと思います。前半の展示をそのまま残して8月15日以降の登戸研究所という後半を新たに付け加えるかたちで、11月の下旬から企画展の後半が始まります。まず一つは証拠の隠滅についてです。いろいろとお話ありましたように、8月15日以降、とにかく徹底的に証拠を隠滅するために、あらゆるものが焼却されるということが行なわれます。今まで具体的にわからなかったこともありますが、今回、正地さんのお話にもありましたように偽札の廃棄処分など、そういうことを含めて展示をしたいと思います。さらに、登戸研究所の証拠が消された後、登戸研究所に勤めていた方のなかには、その後、米軍で働く方も出てくるんです。伴繁雄さんなんかもそうです。どういうところでどんな仕事をしていたかということなどは、調べようとしてもなかなか難しいところも実はございますが、可能な限り、戦後の登戸研究所について実態の解明をしていきたい、また、その中間的な報告として11月からの企画展後半を準備したいと思いますので、ぜひご覧いただければと思います。どうも今日は皆さん、ありがとうございました。

〔終〕

〔追記〕

本稿は、2015年10月24日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第6回企画展関連イベント「元登戸研究所関係者による証言会」の書き起こしに加筆・修正したものです。

